

書陵部本「浄弁並慶運歌集」をめぐる

稲田利徳

れない。

これに対して慶運の方は、父浄弁に比較すれば、まだしも和歌が現存する方である。彼には「慶運法印集」という、元来、三百首から構成された自撰家集が現存するほか、「慶運百首」(「慶運法印集」とは、約四十首ほど重出歌がある)も存し、勅撰集、私撰集などに散在するものを収集すると、およそ五百首程度になる。けれども、この歌数も、中世の歌人としては、少ない方であり、彼の生涯に詠出した和歌のごく一部に過ぎないであろう。心敬の「ささめごと」に、ライバル頼阿に勅撰集入集数が劣っていることを知った慶運は、憤慨のあまり、死の直前「年来の詠草抄物、住みなれし東山藤もとの草庵のしりへに、みな埋み捨て侍ると也」との逸話を伝えているが、あるいは、それに近い事実があったのかもしれない。が、事情はともかく、浄弁・慶運、特に浄弁の現存和歌が極端に少ないことは事実であり、この不足を補う意図もあって、自筆懐紙や自筆約冊を集成したこともあった。

今回は、先のような事情を念頭に置きながら、書陵部に所蔵されている「浄弁並慶運歌集」を、種々な角度から照射してみたい。

浄弁と慶運は南北朝期の歌壇にあって、二条為世門の和歌四天王として、頼阿・兼好らとともに活躍した歌僧である。

中世で一角の歌人とされた人物には、何千首も収録する家集の存するのは珍しくなく、なかには一万を越える家集を現存させている歌人もいる。

こういった傾向のなかで、浄弁・慶運父子の和歌作品を収集してみると、少数しか現存しないことが改めて痛感される。特に浄弁の場合、信頼できるものは、「統千載集」以下の勅撰集、「臨永集」などの私撰集、「花十首寄書」「朗詠題詩歌」などに散在するものを集計してみても、わずかに八十首程度にすぎない。これは浄弁が寡作だったせいではない。享年九十余と推定されている、彼の長い作歌生活を通じ、恐らく夥しい和歌を詠出したに相違なく、現に、心敬などは、その著書「老のくりごと」で、「浄弁法師は卅万首だに詠じ侍るぞかし」という伝唱を紹介している。それにもかかわらず浄弁の和歌が多く現存しないのは、彼自身、生前に纏まった家集を編纂した形跡がないことや在野の歌僧で作品が散佚しやすかったことなどが想定されるが、なにか他に特別な事情があったのかもし

書陵部本「浄弁・慶運歌集」は、他に伝本の所在を聞かない孤本である。後述するように、すでに『私家集大成』に翻刻され、簡潔な解題も加えられている(荒木尚氏執筆担当)。それと重複する面もあるが、まず書誌的概要から説明しておく。

この写本一冊は、縦十八・七釵、横十三釵の袋綴。表紙は丁字引で、左肩に「浄弁・慶運歌集」と書名を記した題簽を貼付。本文料紙は、楮紙製紙交ぜ漉き。丁数は巻頭に遊紙一丁。本文墨付十三丁。一面八行、和歌一首一行書きで、歌題は三丁四字下りに記す。筆者は轍仁親王(文化九年生・882)という。

體

浄弁

万代の春を重ねて足引の八重山遠く立體かな

に始まり、五丁裏の

山

さかの山かしこき跡や残るらむいとさか行千世のふるみち

まで、浄弁歌として四十一首を収める。ついで六丁表の、

初春

慶運

いつしかと體へたて、天原ふりさけみれば春は来にけり

から始まり、十三丁表の

神祇

神垣のをひえの杉の千年迄君をも代をも祈りつるかな

まで、慶運歌として六十六首を収める。

このように、この歌集は、浄弁歌四十一首と慶運歌六十六首、合

せて一〇七首を収録している。もし、これが題簽や署名のように、浄弁・慶運の和歌として信頼できるものであれば、二人の現存和歌が少ないだけに、貴重な資料となる。

けれども、この歌集の存在をいち早く紹介された井上宗雄氏も、浄弁歌に関し、「署名以外に浄弁の集であるという明徴はない」こと、慶運歌の方も「他の慶運の歌と一致せず、今後の検討が必要である」とされたように、この歌集が、浄弁・慶運父子のものであるとの、積極的な根拠は、まだ見出されていないのである。

このことは、『私家集大成』の解題(以下「解題」と称す)でも同趣旨で、本集の表題や巻頭の署名以外に、浄弁・慶運の歌集であることを断定する明徴のないこと、ざりとして、それを否定する積極的な資料も見出されてないので、一応、浄弁・慶運の詠草と考へ、「詳細な検討は今後に俟ちたい」と解題されている。また、近年出版された『和歌文学辞典』(桜楓社)、『和歌大辞典』(明治書院)も同様な説明を加えている。

このように、浄弁・慶運の和歌とおぼしきものが眼前にありながら、全幅の信頼をもって引用、鑑賞できないのは、まさしく、隔靴搔痒の感すらある。

ここに改めて、この歌集に検討を加えてみる所以である。

三

「浄弁・慶運歌集」の考察に際しては、適宜、書陵部の原本を参照するが、ここでの引用や歌番号などは、『私家集大成』のそれに依拠する。書陵部本は、轍仁親王の筆跡になるが、かなりの癖があって読みづらい所も少なくない。けれども『私家集大成』の翻刻は

敵密に行なわれている。ただ、淨弁歌の、

はかなくも花に心をたく哉もの思へとはふかぬ嵐を、(三三)
 の第五句は「ふかぬ嵐に」と解説する方がよく、また、

山吹の花ちる比や山城の井手の蛙も音をや鳴らん(三七)

の「音をや」は、原本では「音をや」と見せ消ちになっているので、「音をは」とみるべきだろう。

さて、この歌集の一〇七首は、すべて歌題詠で、詠歌事情などを説明した詞書は一切ない。しかし、二人の詠草を比較してみると、歌題や配列にかなり近似したところがあるので、まずは、構成、配列の方面から吟味しておきたい。

淨弁歌と慶運歌の歌題に着目してみると、各部立の歌数には多寡はあるものの、一応、四季・恋・雑の順序に配列されている。また、相互に重なる歌題もすくなくない。歌題に着目して、部立と歌題を整理すると、第1表のようになる(歌題の下の数字は歌の通し番号)。

第1表

春 (18首)	部立	淨弁歌の歌題
(18) 藤(16) 款冬(17) 三月尽 (10)花(11・12・13・14・15) 帰雁(8) 春月(9) 春雨 (4・5) 柳(6) 春雪(7) 霞(1) 鶯(2) 若菜(3) 梅	部立	慶運歌の歌題
春 (17首)	部立	慶運歌の歌題
(16)三月尽(17) 11・12・13・14) 款冬(15) 藤 帰雁(8) 春月(9) 花(10) 梅(4・5) 柳(6) 春雨(7) 初春(1) 鶯(2) 若菜(3)		

雑 (1首)	恋 (3首)	冬(4首)	秋 (7首)	夏 (8首)
山(41)	初恋(38) 忍恋(39) 暁別恋(40)	落葉(34) 餃(35) 雪(36) 歳暮(37)	早秋(27) 七夕(28) 七夕後朝(29) 月(30) 露(31) 紅葉(32) 暮秋(33)	卯花(19) 郭公(20・21) 五月雨(22・23) 螢(24) 夏月(25) 納涼(26)
雑 (15首)	恋 (10首)	冬 (0)	秋 (17首)	夏 (7首)
神祇(66) 夢(63) 积教(64) 祝(65) 59) 述懐(60・61) 懐旧(62) (55) 橋(56) 河(57) 旅(58) 松(52) 竹(53) 山(54) 関	不逢恋(42・43) 初逢恋(44) 逢不逢恋(45・46・47) 忘恋(48・49・50) 恨恋(51)		早秋(25) 七夕(26) 七夕後朝(27) 萩(28) 萩(29) 薄(30) 露(31) 虫(32) 月(33) 34・35・36・37) 初雁(38) 霧(39) 摺衣(40) 菊(41)	卯花(18) 五月雨(19) 20) 夏月(21) 螢(22) 夕立(23) 納涼(24)

淨弁と慶運の部立歌数を比較すると、淨弁の方は雑部が一首と極端に少なく、逆に慶運の方は冬部が一首もない。けれども相互の歌題を比べると、鶯・若菜・梅・柳・帰雁・春月・春雨・花・藤・款冬・三月尽・卯花・五月雨・螢・夏月・納涼・早秋・七夕・七夕後

朝・月・露・山と、二十二もの歌題が共通する。淨弁歌集の歌題数は三十五なので、この一致は相当に高く、両歌集は歌題面からみて、密接な関連を有しているとみなしてよい。

「解題」も「或いは同時に詠作されたものが父子の集としてまとめられたのかもしれない」と推測しているが、もし、同時であるとするれば、四十一首とか六十六首といった半端な歌数は気になるもの、ある定数歌の歌題に即して詠出された可能性もでてくる。

第一表の歌題をみると、一―三字の比較的単純なものが多いことに気付く。特に、雑部の松・竹・山・関の歌題といえ、すぐに百首定数歌の歌題設定の規範になった、「堀川百首」が想起される。

事実、「堀川百首」の歌題と一致するものは多く、春部の霞・鶯・若菜・梅に始まり、雑部の松・竹・山・関・橋・河などに到るまで、実に四十一も一致する。この結果は、この歌集が「堀川百首」の歌題を基幹にした詠草ではないかとの想定も抱かせるが、なお「堀川百首」の歌題に納まらない、初春・春雪・春月・夏月・夏月・納涼・早秋・七夕後朝・初雁・暮秋・落葉・歳暮・忍恋・眺別恋・忘恋・恨恋・釈教・祝・神祇といった歌題が散在するのが気になる。これらすべての歌題を包摂する定数歌題はないものか、その探索過程で浮上してきたのが、「弘長百首」の歌題構成であった。

「弘長百首」は、「続古今集」の撰歌資料として、後醍醐院の命により、弘長元年（一三二〇）に成立したとされるものである。^{注7}

次に「弘長百首」の歌題を部立ごとに列挙し、そのうち、「淨弁・慶運歌集」の歌題と一致するものは、四角で囲むこととする。

春二十首

- 初春 霞(一首) 鶯 春雪 若菜 梅(二首) 柳

- 春雨 扇雁 花(五首) 春月 藤 款冬 三月尽

夏十首

- 卯花 郭公(三首) 夏月 五月雨(二首) 螢 夕立 納涼

秋二十首

- 早秋 七夕 七夕後朝 露 萩 萩 薄 虫 鹿 初雁

冬十首

- 月(五首) 搗衣 霧 紅葉(二首) 暮秋

初冬 時雨 落葉(二首) 一月 冬月 霰 雪(三首) 歳暮

恋二十首

- 初恋 忍恋(二首) 不逢恋(五首) 初逢恋 眺別恋 後朝恋

遇不逢恋(五首) 忘恋(三首) 恨恋

雑二十首

- 曉 松 竹 山 河 橋 関 旅(二首) 海路

山家(二首) 田家 述懐(二首) 懷旧 夢 神祇 釈教 祝

「淨弁・慶運歌集」の歌題の異なり数は六十一であるが、そのうち、実に六十が一致する。「弘長百首」歌題に見えないのは、慶運の四十一番歌の

秋寒み庭の千種はうらかれて残るそしるき白菊の花

の「菊」歌題だけ。「弘長百首」の秋部には「菊」はなく、別に「鹿」がある。「弘長百首」歌題に依拠したとすれば、なぜ、「菊」歌題があるのか、あるいは、彼らが参照にした「弘長百首」の一本にはあったのか、そのあたりは不透明である。^{注9}ただ、ここまで一致

すれば(一つの歌題で数首詠する、梅(二首)、花(五首)、郭公(三首))
といったものも、その数に一致するか、それ以上の歌数のものはない)、浄弁・慶運が、「弘長百首」歌題で詠歌したと認めてよいのではなからうか。従来、この歌集が特定の百首定数歌の歌題で詠歌したという考えに到らなかつたのは、四十一首とか六十六首という半端な歌数が、定数歌ではないとの先入観を与えていたためだろう。

この事実の確認は、この歌集の種々な疑問に、かなりの解決を与える。

「弘長百首」は、南北朝時代の二条派の歌人たちにとつて、規範とすべき百首定数歌とされていたらしく、頼阿も「井蛙抄」^(註)で、戸部(為藤)の言説として、「戸部云、弘長仙洞百首は(中略)誠歌毎におほやけしく、たけたかく、うるはしき体なり。当家二代歌も此御百首殊規模也。百首は是を本にて詠すべし」と記録している。二条派の歌人であり、かつ為藤らと交宜のあつた浄弁、慶運は、ある時、「弘長百首」の百首題で百首詠出を試みたものではなからうか。

勿論、二人の詠歌時期は父の浄弁が早く、その後、随分たつたら、父の歌稿に刺激されて慶運も百首を試みたという時間的な差を想定することも可能ではある。

けれども、浄弁歌の、

深き夜の老のね覚の時鳥我ためになく初音とそ聞(一〇)
何ゆへにさのみ哀の増らん昔も聞し秋の初かせ(二〇)

よそにのみ思ひし年の暮はとりあやしやかに身にこそ老ぬれ

(三七)

などに、老年の境涯にある者の感慨が吐露されているのに対し、慶運歌には、

世をすて、山のおくにと思ふ身のあらましにたすむ心かな
(三八)

世のうさをわすればはてなはいか斗我住山のすみよかるらん(三九)
など、出家前發頃の心境を詠じた、比較的若い頃を思わせる歌があることは看過できない。和歌は虚構の世界のものだから、詠歌の内容を、ストレートに作者像と結びつけるのは安易ではあるが、それを考慮しても、二人の詠草には、先のような雰囲気が感受されるのである。

「解題」も、同様な歌を根拠に、慶運歌集の方も「恐らく台殺されていゝ浄弁歌の歌と時を同じくして詠作されたもので、正和四(四〇)年の花十首寄書とほぼ同じころ、二〇歳前後と考へてよいであろう」との意見を提示している。

ただ、成立を先述したように想定したとき、各百首あつたものが、なぜ、四十一首と六十六首という半端な歌数になつたのか、改めて疑問が浮上する。二人には重なる歌題もかなりあるので、百の歌題を二人で配分して詠歌したのではなからう。これには、種々なケースが想定可能である。

例えば、二人の各百首には誰かの盲点があり、その合点歌だけを、あるいは書写の階梯で秀歌とおぼしきものを抜き書したケースも考えられなくはない。

しかし、「弘長百首」の歌題配列と比較すると、各部立内では配列順序が前後しているところもあるし、浄弁歌と慶運歌の間でも、順序が一致しないところがある。こういった現象は、各百首を最初

から順次抜書した場合には起こりえないものである。また、浄弁に雑部が一首しかなかったり、慶運に冬歌が一首もないのは、その部分の欠脱を考えさせるが、それも、所々に欠脱があるので、一丁脱落といった単純なものではなからう。

ただ、各百首歌を、短冊、あるいはそれに類したものに一首ごと書いていたとすれば、そのうちの幾枚かが喪失したり、各部立にまとめたときも、相互に配列が乱れることもあり得る。このケースが一番可能性が高いかもしれない。

いずれにしても、「浄弁慶運歌集」は、元来、浄弁と慶運父子が、「弘長百首」の歌題に依拠して百首を詠出したものであろうこと、しかも、二つの百首は同時に詠出された可能性が強いこと、なんらかの事情で、二百首のうち、一〇七首だけが現存したと推測される。

従って、歌集の性格としては、ある年代にわたって詠じた歌稿から、適宜、抜書・編纂した家集といったものではなく、百首定数歌の残欠とみなすのが妥当であらう。この推定が正誤を射たものとすれば、浄弁、とくに慶運の「慶運法印集」や「慶運百首」に一首も一致歌がないという不審も、編纂時に、この百首が手元になかったことに起因するとみて、納得がゆくのである。

四

これまでの記述は、「浄弁慶運歌集」を、浄弁・慶運の歌集と認定しているような書きぶりになってしまったが、その点は確認されているわけではない。

ただし、元来、「弘長百首」の歌題に依拠した百首歌であったと

する先の真付けは、この歌集が、弘長以後の詠出歌であること、および二条派歌人のものらしいという点で、歌集の信頼性を側面から支えることにはなるだろう。

ここでは、先述の確認事項を念頭に置きながら、この歌集が、表題通り、浄弁・慶運のものである可能性の強いことを論証してみた。

まず、手続きとして、索引類に当り、この歌集の歌に、他の歌人の和歌と一致するものの有無を調査した。索引としては『新編国歌大観』（勅撰集編・私撰集編・私家集編Ⅰ・私家集編Ⅱ・定数歌編）、『私家集大成』などに当たってみたが、一致するものは見出されなかった。この調査結果は、浄弁、慶運以外の歌人の詠歌が混入していたり、他人の詠歌を集めて、浄弁、慶運の家集らしく偽作した可能性の少ないことを示唆している。

次に、この歌集の和歌の措辞や発想に、南北朝期の二条派の特色を有するもののあることを、具体的事例で示しておく（以下の引用には濁点を付す）。

浄弁歌の、

消そむる雪のふるすの鶯はかすまぬ先に春や知らむ（三）

にみえる「雪のふるす」の措辞は、「堀川百首」の、

冬すみしふるすは雪にうづもれて谷の鶯春と告ぐなり

（仲実・登）

の歌の傍線部分を短絡表現にして創造されたものかもしれないが、『新編国歌大観』の勅撰集編・私撰集編・私家集編Ⅰの範囲では、一首もみえない特異な措辞である。ところが、南北朝期の応制百首である「延文百首」には「鶯」の歌題で二首みえるのは興味深い。

うぐひすはいでぬる跡の谷陰のゆきのふるすにわれふるすなり

(從二位源有光・四〇〇)

春さむみ雪のふるすをいでがての谷かげにのみ鶯ぞなく

(從三位藤原実名・二五〇)

これで見ると「鶯」と「雪のふるす」「ふるす」は、「降る」と「古る」をかける)の関連は、どうやら南北朝期の二条派歌人の間で創造されたように思われてくる。

また、慶運歌の「花」に、

山のはは深き霞にこもり江のはつ瀬の桜ちるをだにみず(二)

と、「こもり江のはつせ」と「桜」の結合した表現があるが、この結合も『新編国歌大観』の範囲では、

こもりえの初瀬の桜さきしよりあらはにかかる花のしら雲

(新千載集・春上・等持院贈左大臣・六〇)

開きにけりきのふは枝にこもりえのはつせのさくら雲とみるま

(草庵集・春下・二二)

と、二首見出せるだけである。この二首の作者である足利尊氏や頼阿は慶運と交誼があった。かかる例は、他にも数例あるが割愛する。要するに、この結果は、当面問題としている歌集が、南北朝期の二条派歌人の詠歌であろうとの大枠を設定させうる。

実際、この歌集の歌風は、浄弁・慶運・頼阿などの和歌と比較してみても、特に違和感はないのである。

表題や署名通り、この歌集が、まさしく浄弁・慶運のものであることを決定付ける確実な根拠は、今のところない。けれどもその可能性は十分あることを、信頼できる他の浄弁・慶運歌などの措辞や発想と比較しながら、跡付けてみたい。

まずは浄弁歌の方から。浄弁の歌は現存するものが極端に少ないので、多くの事例を列挙できないが、措辞では先掲した、

(A)消さむる雪のふるすの鶯はかすまぬ先に春や知らむ

(浄弁歌集・三)

の「雪のふるす」の措辞が注意される。これは先述したように、浄弁独自のものではないが、『梅澤澁柿庵遺品入札』目録(東京美術倶楽部、昭九・一)掲載の、浄弁自筆短冊の、

(B)きえあへぬ雪のふるすのうぐひすはたれにとひてか春をしるらん

という歌の傍線部分が一致して注意される。このことはすでに拙稿で触れたように、措辞は一致するが、発想は逆になっている(以下、「浄弁・慶運歌集」の歌を(A)、他の資料のを(B)として引用)。

紅葉

(A)時雨るれば夕日のかげは小倉山もみぢぞいとど照増りける(三三)

(雨後紅葉)

(B)紅葉ばに露をのこして村時雨今ひとしほの色やそふらん

(臨永集・秋上・浄弁)

時雨が木の葉を染めるのは、極めて常套的なものにすぎない。が、この両歌は、その伝統的な発想を前提とし、すでに紅葉した葉に時雨が降りそそぎ、「いとど照増りける」(A)、「今ひとしほの色やそふらん」(B)と、一段と鮮やかに色付くと発想した点で近似する。

次に慶運歌の方は、他に現存するものが浄弁より多いので、こういった事例は少なくない。

逢不逢恋

(A)逢坂の関の関も同じ世にまた立かへるしるべともなれ(四七)

寄閑恋

(B)逢坂のせきの関守なれをしそこえし昔のかたみとはみる

(慶運法印集・三三)

「両歌が一致する措辞「逢坂の関の関守」を取り込んだ早い例歌は、「堀川百首」の、

あふ坂の関のせきもり出でてみよむまやづたひの鈴聞ゆなり

(匡房・四〇)

の歌である。この措辞は、リズムカルで印象鮮明ゆえ、本歌を意識させすぎたためか、二十一代集では「新勅撰集」(隆季・七五)に一首みえるだけで稀少。他に「御室五十首」(兼宗・三〇)、「隆信集」(六五)、「統草庵集」(六五)に散見するが、先の(A)(B)の歌は、逢坂の関守に、現世で再会できる「しるべ」となつてほしいと願つたり(A)、関守を恋人に逢えた昔の「かたみ」と見ると、恋情も近似する。

初逢恋

(A)年月のつらさにこりぬ心こそめぐりあふべき契なりけむ

逢恋

(B)とし月の憂きにこりぬを契りにてなびく心もある世なりけり

(慶運法印集・三七)

両歌の上二句は「つらさ」と「うき」の相違はあるが、ほぼ同じ意味の表現とみてよい。しかも、長い年月にわたつて恋人に逢えない憂さや辛さに懲らないで、じつと耐えたことで、やっと逢う顔を見ることが出来た―その心を「ちぎり」と認識する発想も類似する。恋歌としては珍しい発想歌だけに、(A)(B)が同一歌人の作であるとの可能性も強くなる。

月

(A)庵結ぶ外山の月は影更てまさきかつ散秋の淋しさ

山月

(B)澄みのぼる外山の月に聞ゆなりまさきかつちる秋風の声

(慶運法印集・二八)

この両歌も「外山の月」と「まさきかつちる」の二つの措辞が一致する。まさ木が散る歌としては、源俊賴の「日くるればあふ人もなしまさきちる」(新古今集・冬・五五七)が著名だが、さらに、この俊賴歌と「古今集」の「み山にはあられふるらしとやまなるまさきのかつらいろづきにけり」(神遊歌・二七)を本歌にした西行法師の、

松にはふまさきのかづらちりにけり外山の秋は風すさぶらん

(新古今集・秋下・五三)

の歌もよく知られた歌である。(A)(B)の歌も、こういった歌の影響下に詠作されたものであろう。また「まさきかつちる」の措辞を索引類に当てみると、「新撰六帖」(信実・美凸の一首だけ。その点、(A)(B)は、「まさきかつちる」の措辞が一致し、しかも「外山の月」を配して、秋の寂寥の雰圍氣を詠じている点で、類似の発想歌である。この他に、

薄

(A)風渡る野べの尾花をつたひ来て袂にあまる夕暮の露

袖露

(B)心なき草木はさぞなほらふだに袂にあまる秋のゆふつゆ

(慶運法印集・二三)

の下二句における措辞も類似する。

以上の事例ははかって検討したことがあるが、その後^{注14}に気付いたものを二例ほど追加したい。

初雁

(A) 秋寒み今ぞきにける、山端に夕ゐる雲の衣かりがね(三〇)

初雁

(B) 夜やさむきおのが越路の秋風にはるばるきぬと衣かり金

(慶運法印集・二四)

この二首は、

夜をさむみ衣かりがねなくなへに萩のしたばもうつろひにけり

(古今集・秋上・よみ人しらず・三三)

の系譜につらなるものだが、「今ぞきにける」「はるばるきぬと」などと衣の縁語をきかせるなど、発想、修辭ともに近似する。また、

納涼

(A) 夕附日のこるもよその山陰に軒端のならの風のすゞしさ(三四)

(B) 軒ばなるならのひろはの村時雨ふるほどよりも音のはげしさ(三五)

(藤葉集・慶運)

の両歌は、軒端に櫓の木を配しているが、この素材結合は、今のところ他に例がなく、注意される。

以上、現存する浄弁、慶運の歌と比較し、措辞や発想の近似するものを例示してみた。措辞や発想の類似だけで、その歌の作者を確定付けることは、余程の特色がない限り、困難であることはいうまでもない。

けれども、二条派歌人の尊重した「弘長百首」の歌題に依拠して、特定の措辞には、南北朝期の二条派歌人間に使用された

ものがあること——こういった大枠のなかで、先の幾つかの類似をみると、この歌集は、題簽の書名や署名の通り、浄弁・慶運の歌であるとの可能性が濃厚であり、現在、それに矛盾をきたす事象はみいだしていない。

なお「実隆公記」(別記・文明十五年七月二十二日の条)に、「法印浄弁詠草依仙洞御所管筆之次第」なる書名がみえるが、この詠草が書陵本の浄弁の歌と同じものかどうかは不明である。

五

「浄弁・慶運の歌集」が、その署名通り、浄弁・慶運の歌集であること、それも「弘長百首」の歌題に依拠した百首定数歌の残欠であろうことを前提として、この歌集の歌風的一端に触れておきたい。

まず、第一の特色は、特異な措辞が少なく、勅撰集的な歌語の範疇のなかでのものが多いこと。これは当時の二条派歌人たちにも、等しく共通する傾向である。

まず、浄弁歌には次の例がある。

〔から衣たつたの河に影みえて波のあやをる青柳の糸(三六)〕
唐衣たつた河原の川風に波もてむすぶ青柳のいと

(統後拾遺集・春上・後鳥羽院御製・四)

この両歌は、「かせふけばなみのあやをるいけみづにいとひきそふるきしのをやぎ」(金葉集(二)・春・源雅兼・三)の発想歌の系譜につらなるものと思うが、童田河の水面に映じた青柳の糸を、縁語仕立てで織物と関連付けた点、発想、措辞とも類似する。

「置露も色に出なばいからせむいはで忍ぶの森の下草(三九)

「露はまづ色にやいでん思ふともいはで忍ぶのもりのした草

(新拾遺集・恋一・権大納言義詮・九五九)

両歌の下旬は全く一致するうえ、上句も忍ぶ恋情が露の色にあらわれるのではないかとの発想も酷似する。この他、

「みる程もなく明ぬる夏のはよはいづるぞ月の盛なりける(四五)

「みるほどもなく明行く夏の夜の月もや人の老となるらむ

(新後拾遺集・夏・前大僧正隆弁・三四)

なども、下旬の発想は相違するが、上句の表現はほぼ一致する。また、

「我宿の庭のよもぎふ露おちてみを秋風のふかぬ日ぞなき(二二)

「水茎の岡辺のまくず枯れしより身を秋風のふかぬ日はなし

(統後拾遺集・恋四・鎌倉右大臣・六七)

の両歌も、上句の光景は相違するものの「身を秋風」に「厭き」をかけた下旬は、ほぼ一致する。

こういった傾向は慶運の歌にも認められる。

「いつしかと霞へだてゝ天原ふりさけみれば春は来にけり(二)

「いとはやも春きにけらしあまのはらふりさけみれば霞たなびく

(新千載集・春上・後照念院関白太政大臣・五)

両歌とも、安倍仲磨の歌(古今集・歸旅・巴恋に依拠している)といえ、霞を見て春の到来の早さを詠じており、同じ発想歌。

「鈴鹿河八十瀬の波も音高し神路の山の五月雨の比(三〇)

「さみだれの日をふるままにすずか河やせのなみぞこゑまさるなる
(詞花集・夏・皇嘉門院治部卿・六)

この両歌も、鈴鹿河が増水して河音が高くなったさまを描写して、近似の発想で、措辞の位置を移動したにすぎない。「詞花集」は「鈴」の縁語として「ふる」「こゑ」を出し、慶運歌は、「こゑ」とせず、「音」ととらえ、「神路の山」の「神」と「鈴」をも関連付け、相違をみせている。

「いたづらに恨はてぬとしらせばや逢にはかへぬ命なりとも(四三)

「後の世とちぎりもおかばいそがましあふにはかへぬ命なりとも

(新千載集・恋二・法眼宰承・三三)

両歌は、「いのちやはなにぞはつゆのあだ物をあふにしかへばをしからなくに」(古今集・恋二・友則・六三)を念頭に置き、下旬は全く一致する。

身をかくす山路の庵の窓の竹猶うきふしのしげき比かな(四三)

かくてだに猶うきふしぞ忘れぬみ山の窓のくれ竹

(統後拾遺集・雑中・前中納言為方・二〇八)

風わたる窓のくれ竹うきふしにさもやすからぬよを歎くかな

(統後拾遺集・雑中・前大納言俊光女・二〇三)

これらの歌は、「窓の(真)竹」に遁世の身を暗示し、それでも世の「うきふし」(竹の縁語)から脱却できないことを詠嘆し、発想、措辞ともに近似する。

これに近い例歌は、他にも散在するが、長くなるので割愛する。

この、言葉に制限を設け、雅語の範囲で和歌を創作する詠歌態度は、なにも淨弁、慶運に限ったものではなく、同じ四天王の一人である頓阿の歌にも顕著であることは、かつて論及したところである。こういった詠歌理念は、二条派の為世の歌論書「和歌庭訓」や

「和歌用意条々」で強調する意見——和歌は伝統を踏まえ、いわば

人間の顔が他の人より少しずつ微妙に相違するような、わずかな異相に新しさを求めて詠歌すべきだという歌論と通うものである。

この歌集で第二にあげられる特色は、本歌取歌が多いことである。この現象は、京極派歌人には、いわゆる本歌取が稀少であることと対照的である。そのうちの幾首かを列挙しておく。まず浄弁歌から。

梅

梅がえの雪吹はらふ春風にさけるさかざる花は散つゝ(五)

この歌の本歌は、

春の色のいたりいたらぬさとはあらじさけるさかざる花の見ゆらむ
(古今集・春下・よみ人しらず・三)

である。本歌は、花の開花している所と、していない所の存在への理屈っぽい疑問提示だが、浄弁歌は、季節は同じ春に設定しながら、梅の枝に積った雪が吹き払われるところに着目、雪を花に比喻して「さけるさかざる花」の景を描いて転換している。

歳暮

よそにのみ思ひし年の暮はどりあやしやかに身こそ老ぬれ

この歌は、
(三七)

あひみんとたのむればこそくれはどりあやしやいかがちかへるべき
(金葉集(一)・恋上・源顕国・三六)

を本歌とする。本歌は「呉織(くれはどり)」に「来れ」をきかせるが、浄弁歌の方は、「暮れ」をきかせ、本歌の恋の世界を述懐に転換する。因みに「柳風和歌抄」^{注17}には、四天王の交友圏の一人でもある寂恵法師の歌として、

数ふれば今年もすでにくれはどりあやなくつもる老ぞ悲しき

と、浄弁歌と酷似する歌のあるのも興味深い。

次に慶運歌の本歌取歌を吟味してみる。

花

花みてぞ長閑かりける吹風のおさまれる代の春のころは(三)
この歌の本歌は著名な、

世中にたえてさくららのなかりせば春の心はのどけからまし

(古今集・春上・業平・三)

だが、季節は本歌と同じ春に設定しながら、風も治まった御代ゆえに、花を見てものどかだと逆発想に変化させている。

款冬

行春もやどりとらなむ夕暮の庭の籬は山吹のはな(五)

この歌は、去り行く春を擬人化し、籬には春の名残の山吹が咲いているので、それを縁に宿ってほしいと呼びかけているが、本歌は、

ゆふぐれのまがきは山と見えなむよるはこえじとやどりとる

べく
(古今集・難別・遍昭・五)

という、人との惜別の情を主題にしたものである。

夏月

いかなればふすかとすればあくる夜の月まつ程の久しかるらん
この歌は、
(三三)

夏の夜のふすかとすれば郭公なくひとこゑにあくるしののめ

(古今集・夏・貫之・五六)

を本歌とする。本歌が夏の夜の短さを詠嘆するのを前提に、短いとされる夏の夜も、月の出を待つ時間は、とても長く感ずるのはなぜかと屈折させて疑問を提示し、月を待つ間の焦燥感をきわだたせる。慶運歌には、本歌の発想を、このように逆手にとったり屈折さ

せたものが散見する。

また、本歌取というのではないが、古歌を前提にした、次のような歌も存する。

関

旅ごろも立よる程も今はあらじあれて年ふるふはの関やは(五)
この歌は、恐らく、

人すまぬふはの関屋のいたびさしあれにし後はただ秋のかせ

(新古今集・雑中・摂政太政大臣・二〇二)

を念頭に置いて詠出されていよう。良経の歌は、関守のないなくなった荒れた不破の関屋を描写するが、慶運歌は、さらに時間的経過を考慮し、今では荒れた関屋すら存在しないとす。こういった、先蹤歌の詠出された時点から、さらに経過した対象の様子を描写する方法は、

橋

朽ぬるかながらの橋のはし柱たつる斗は世にのこりつゝ(五)
の歌と、

くちもせぬながらのはしのはしはしらひさしきほどのみえもす
るかな (後拾遺集・賀・平兼盛・四三六)

の先蹤歌との間にもみてとれる。

以上、この歌集の淨弁と慶運の和歌の特色として、先蹤作品の措辞や発想に類似するものが多いことや本歌取の多さと、その方法の一端を検討してみた。

類型美を企図し、本歌取で転換の妙をはかる詠歌姿勢は、まさしく当時の二条派歌風と傾向を同じくするものである。

なかに、

霧

夕日かげ残るかたのみあらはれて霧にこもれる峯の松はら

(慶運・三)

夕立

浮雲のかゝらぬ方はみえねども日影ほのめく夕立の空

(慶運・三)

のように、自然の微細な動きをキャッチした、京極派的な和歌も若干散見される。また、

梅

この本はさぞ遠からし梅のはな匂ひもうすく春風ぞふく

(淨弁・四)

春雪

春やとき霞もあへぬ散花の面影さむく雪は降つゝ

(淨弁・七)

の傍線部のような特異な措辞を駆使した歌も稀にある。「匂ひもうすく」は、他に用例を見出せないし、「面影さむく」も、慈円歌の

やま里的庭も木ずゑもふりとちておも影さむき雪の曙

(拾玉集・四七四)

を見出した程度で、いずれも珍しい措辞である。しかし、こういった例歌は少なく、大部分は先述したような和歌である。

書陵部本「淨弁と慶運歌集」は、これまで、表題や巻頭歌の署名以外に、淨弁・慶運の歌かどうか、積極的な根拠をつきとめられなかった。

本論考では、この歌集の歌が、「弘長百首」歌題に依拠して詠出

された、百首定数歌の残欠であろうことを実証した。さらにこの事実を前提に、特異な措辞の分析から、この歌集の歌が、南北朝期の二条派歌人のものであろうとの大枠を定め、信頼できる浄弁・慶運歌の措辞や発想に類似するものが少なくないことを指摘し、まずは、署名通り、浄弁・慶運の詠草とみなしてよいと判断した。さらに後半には、歌風の問題にも触れたが、その傾向は同時に、この歌集が二条派歌人のものであることを側面から支持する結果をもたらすことにもなったといえよう。

注1 拙稿「浄弁の自筆懐紙・短冊集成」(岡山大学教育学部研究集録、第67号)で、自筆懐紙歌十三首と自筆短冊歌三十二首を収集したことがある。

2 木藤才蔵氏校注『連歌論集三』による。なお、伝本によって三万首とするものもある。

3 拙稿「『慶運法印集』について」(中世文芸、第46号)に詳論したことがある。

4 日本古典文学大系本による。

5 注1の拙稿及び「慶運の自筆懐紙・短冊集成」(岡山大学教育学部研究集録、第69号)。

6 『中世歌壇史の研究(南北朝期)』。

7 佐藤恒雄氏「弘長百首考(上)——成立をめぐって——」(香川大学教育学部研究報告第一部、第三十五号)参照。

8 百首部類(元禄十三年刊)所収板本を底本とした、『新編国歌大観第四卷』による。

9 「弘長百首」の諸本(十六本)を調査された佐藤氏にこの

点を質問したところ、他の諸本にも「菊」歌題はないのとこと。「弘長百首」は「持衣」「霧」の順だが、慶運は「持衣」「菊」の順である。これからすると、「きり」とあったのを「きく」と誤認したのではないかという示唆を佐藤氏より受けた。

10 『日本歌学大系卷五』による。

11 年時的にみて、浄弁が「弘長百首」の詠進に参加したことを想定するのは無理である。

12 注1に同じ。

13 群書類従卷一五六による。

14 注5の拙稿。

15 群書類従卷一五七による。

16 拙稿「『頓阿百首』の諸問題」(文学・語学、第10号)。

17 群書類従卷一五八による。

※なお、本論考で引用した、勅撰集・私撰集・私家集・定数歌で、特に注記しないものは、すべて『新編国歌大観』の本文と歌番号に依拠している。

—— 岡山大学助教授 ——